母性・母性意識・母親意識・母親同一性の概念の検討

山根　望*・藤井　優子**・名島　潤慈

An Examination of Maternity, Motherhood, Maternal Consciousness and Maternal Identity

YAMANE Nozomi*, FUJII Yuko**, NAJIMA Junji
(Received August 5, 2008)

キーワード：母性、母親、母親同一性

はじめに

厚生労働省によると、平成18年度全国の児童相談所が対応した児童虐待相談対応件数は、37,323件であった。この相談対応件数は、統計を取り始めた平成2年度を1とした場合の約34倍、児童虐待防止法施行前の平成11年度に比べて約3倍強と、年々増加しているという。平成18年度における主たる虐待者は、実母が23,442件（62.8%）と最も多く、次いで実父の8,219件（22.0%）となっている。虐待の背景には、少子化や核家族化による家庭の育児能力の低下、経済的困窮、養育者の心理的あるいは社会的問題、養育者自身の被虐待経験、配偶者間のDVなど様々な要因が考えられる。

虐待の背景には様々な要因が考えられるのに、実母が主たる虐待者として一番多いことから最近の女性には母性が欠如していることを強調し、母親の無責任さや冷酷さに原因を帰する報道がなされる場合が多いように思われる。また、一方で、われわれは子育て支援センターや教育機関で勤務しているが、きちんと養育しているにもかかわらず自分には母性がないのではなかろうかといって悩む母親や、子どもとの関わり方や子どもの発達の一つ一つにこだわり、子どもの気がかりな面の多くを自分自身に帰する母親に出会うことがある。

母性神話が取りざたされてひさしいが、このように虐待する（してしまった）母親に対する激しい批判や母親自身による母性へのこだわりは、母性に対する過度の期待や理想が日本社会に根強く残っていることを現わしていると考えられる。しかしながら、母性の定義や概念は多義的であいまいである（大日向，1988；花沢，1992）。また、母性は母子関係で語られることが多く、女性のなかで発達する母性そのものを扱った心理学的研究は非常に少ない（大日向，1988；花沢，1997）。しかも、母性という言葉だけでなく、母性意識、母親意識、母親同一性といった新しい言葉を見かけるようなり、それらの言葉が錯綜している現状がある。本研究では、母親の心理に関する主要な研究を整理し、母性、母性意識、母親意識、および母親同一性の概念を再検討する。

＊山口大学大学院東アジア研究科　＊＊山口大学大学院教育学研究科

1．母性の概念

母性という言葉は、女性や母親の特性を表わすものとして日本社会で一般的に受け入れられており、母親や母子に関する場面で多くの人が口にする言葉である。母性は英語では motherhood や maternity にあたる。日本語ではどちらも「母性」とか「母性愛」、あるいは「母であること」という訳語がつけられている。ただし、maternity は妊娠期を含めるという点で motherhood とは異なっている。しかし、欧米の論文を見ても、motherhood と maternity のどちらを使うかは研究者の判断に任せられているようである。

母性の概念とは「母としてもつ性質。また、母たるもの」(広辞苑第6版) や、「女性が、子どもを守り育てようとする母親としてもつ本能的な性質や機能」(精選版日本国語大辞典3) というような曖昧なものである。この母性という概念は、先に述べた定義に明らかなように、女性に本能的に備わっているもので母親であれば誰でも持っているものという社会通念や、これまでに女性研究者が少なかったことから、その内容について検討されることはほとんどなかったと考えられる。また、子どもの発達に対する母親に焦点を当てた研究がほとんどで、子どもから見た母子関係のなかで母性が語られてきたことも大きな理由として挙げられる (大日向, 1988;花沢, 1992)。しかし、近年母性は本能的なものであるという社会通念は見直され、その概念の研究がいくつかなされている。

母性研究において、Deutsch (1945) は先駆的かつ包括的な母性論を述べ、その後の母性研究に大きく貢献した。日本には、『母性心理学』(花沢, 1992) がある。花沢は、それまで医学、母性看護学、心理学といったさまざまな分野で母性がどのように定義されてきたかを検討したうえで、母性を「児に対する母親としての関わり、あるいは母親らしい関わりに示される女性のパーソナリティの一部」と定義している。そしてさらに、母性を妊娠・出産という体験によって形成され発達していくものととらえている。また花沢は、母性の一般的様相や個人差、ならびにその形成や発達の過程を明らかにし、さらにそれが子どもの発達に及ぼす影響などについての研究を目指す心理学の一分野としての母性心理学を提言した。

次に、大日向 (1988) は花沢と同じく母性は形成され発達・変容するものであるという立場から、それまでの母性の定義やわが国における母性信仰の実態から母性について検討している。しかし、妊娠・分娩に限らず、女性が1人の人間として、また、1人の女性としてどのように生きようとしているか、という人生に対する姿勢が問題であるとしているところが花沢とは異なっており、母親である女性の社会参加や対人関係のあり方に焦点を当てた研究を多く行っている。たとえば大日向は、母親の対人関係の枠組みを明らかにし、そのうえで子どもに対する感情と母親の対人関係のあり方との関連について検討している。この研究では、対人関係の枠組みに友人や仕事仲間等を含まない、生活空間の狭い母親の子どもに対する関わり方に弊害が生じていることが示唆されており、そうならないために大日向は母親が自らの生活空間を確保し、広い対人関係を形成することが必要であると考察している。

大日向 (1988) はまた、母性を女性のライフ・サイクルの中に位置づけられた広い視野のもとで検討する必要のあるものとし、今後の母性の発達を支えるための3つの条件を提示している。その1つ目は、母親となる、または母親である女性が自らの生き方を明確にし、その生き方との関連で母親役割を受容する意義を認識するという心的営みが不可欠で

あるということである。2つ目は、社会参加を含めて育児以外の母親自らの生活を有することであるが、これには母親の世界で獲得された視野の広がりを、子どもとの関係にいかに還元するかということが重要としている。3つ目は、母親自身が対人関係に広がりを有することと、安定した夫婦関係を築くことである。大日向によると、人間の生命の生産と養育のすべてを意味する概念に、等しく「母」という言葉をつけるところに問題が所在し、人間にとって子どもを産み育てることは、男女両性の成体における広義の養育欲求・養育行動として把握されるべきものである。ちなみに、大日向は母性に代わる適切な概念として「育児性」という概念を提唱している。

蘭（1989）は、花沢や大日向とは異なった新しい概念を提唱している。蘭は自分自身の妊娠・出産・育児の体験を通して、女性が母親になり、母性をその心の中に確立するための新しいモデルとして「Co－セルフ」という概念を提唱している。Co－セルフとは、女性が妊娠したことを受け入れ、胎動を感じることによって子どもをはらんでいるというボディイメージを形成し、出産を終え、子どもが4歳になるくらいまでの間だけもつ子どもとの共同感のことであり、自分と子どもを切り離せない存在のように感ずる心理である。Co－セルフの形成は母性のめざめと形成であるとされており、Co－セルフの形成によって、今まで出産したことがない女性でも初期の母親役割行動をスムーズに遂行できるようになるとされている。また、Co－セルフを子どもが4歳になるくらいまでとしていることについて、4歳という年齢が、子どもが自由に歩き、会話をし、自分を主張できるようになり、さらに母親の範囲から離れて安全に遊べるようになったためにCo－セルフという子どもとの共同感を持ち続ける必要がなくなり、母子分離が始まる時期であるためと説明している。Co－セルフを形成し、確立していくことが母性の確立に繋がると蘭は述べているが、Co－セルフによる新しい母性モデルを考えていくことを提言するに留めている。

花沢、大日向、蘭は母性研究に大きく貢献したが、それ以外の先行研究のなかから抜粋した母性に関する定義については表1を参照されたい。

Deutsch（1945）以降の母性研究を概観すると、研究者によって表現は異なるが、母性は形成され、発達していくものであるという点が共通している。特に、1980年代以降における母性研究の高まりは、1960年代半ばから起こった女性解放の運動が落ち着き、改めて女性が母親になることの意義についての問い直しが高まったためではないかと思われる。多くの研究者が分析しているように、母性は従来の「母性は本能である」というような曖昧かつ絶対的な概念とは異なり、すべての女性が持っているわけではなく、また、女性だけが持っているものでもないこと、妊娠や出産という体験の受けとめ方や、母親を取り巻く社会的状況によっても変化がみられるものであると考えられる。したがって、個人の主観的な体験に関する母性研究が今後必要であろうし、また、母性が母親を取り巻く社会状況によって変化するものであるとすれば、社会情勢や生活状況が著しく変化した21世紀に生きるわれわれの母性や母性概念を改めて問い直す研究が必要であろう。

2．母性意識の概念

花沢（1992）は、母性意識を「母親になった女性がもつ、自分は母である、あるいは母になったという『母親としての自覚』」であり、「妊婦がもつ、自分は母になるという自覚」であると概念づけしている。また、この母性意識は育児行動の基盤であるとした。そのう

表１　主要な先行研究における母性の定義

＊「社会学的・生理学的・感情的な統一体としての、母の子に対する関係を示すものである」(Deutsch, 1945)

＊「児に対する母親としての関わり、あるいは母親らしい関わりに示される女性のパーソナリティの一部」(花沢, 1992)

＊「いのちを産み、はぐくみ、小さく弱きものを慈しみ守る性質」(高石, 2003)

＊「私たちは、「母性」の総称のもとに、「出産」、「哺乳」、「母性的養育」、「母性愛」そして心理的・文化的イメージとしての「暖かさ」「優しさ」「甘え」「許し」「豊穣」などを連想しがちだが、そのような観念連合は、「母性」のひとつの側面にすぎない。・・・（中略）産育へのプラス方向の関わりの中で、男性にはなくてとくに女性にのみ固有の部分を「母親役割」と呼び、母親にのみ固有の役割遂行の結果あらわれてくる特性を「母性」と呼ぼう。・・・(中略）親性の２つの原理「一つは「受容性」であり、子どもを無条件で肯定し、受け入れていく精神態度である。もう一つは、「規範性」であり、子どもに社会のルールをつたえ、社会化していく精神態度である。実際の母親も父親も、「受容性」と「規範性」という二つの原理を両方とも持ちうる。母親が優しく、父親が厳しいというのは、従来の母性/父性のステレオタイプにすぎない。」(船橋, 1992)

＊「母親の子に対する感情、行動、態度の背後にあって、さまざまな養育行動を喚起し、維持する機能を持つ行動－情動複合体である。さらに、それを可能にするような、母親の心身の条件や知識－価値体系をも広義の母性に含めることも可能であろう。」(村井, 1989)

＊「女性の妊娠・出産・育児に関わる生理機能という身体的側面と、それらにまつわる心理的な側面との心身両面の性質」(名島ら, 1997)

＊「女性が次代を産み育てる課題を果たすために、備えている心身の特性を総称して母性と言う」(前原, 2000)

＊「妊娠・分娩・哺乳に関わり女性固有の生理的特性を意味するものから、わが子に対する慈悲や献身といった特定の態度および感情をさすものまで多義にわたっており、母性の概念は用いる人や領域で大きく異なる。」(森田, 2005)

＊「本論は、現代社会における「母性概念」が何によってどのように規定されてきたのか、という疑問から出発した。それは二つの疑問からである。一つは、母子保健法などを含む医学的言説に根拠づけられることにより、性と生殖によって規定され、「母性とは、女性がよい子どもを産み育てること」になったと考えられる。二つには、「母性」を社会的・歴史的にみると、「母性とは一般的にこういうもの」とする理念的・観念的側面と、「自分が経験したり直面している母性とはこういうもの」とする実体的な側面によって規定されることがあるように思われる。

そして、この規定される「母性概念」は、一人ひとりの人間が持つ属性によって異なっているように思われる。また、生涯においてどのような出来事に出会うかによっても変化していくように思われる。」(松村, 2005)

えで、母性意識を女性が母親になる、あるいは母親であることの自覚である「母親自覚」と、自覚に基づく妊娠・分娩・育児への態度や価値観である「母性理念」の包括であるとして述べている。花沢は、妊産婦は妊娠・分娩・産褥期のどの時期に母親自覚が高まるかという点について従来の研究をまとめ、多くの妊産婦に妊娠中の胎動や超音波診断などの体験によっても母親自覚が生成するとしている。

花沢（1992）によると、母性意識の１つの側面に「自分はどのような母親であるべきか」という母性理念がある。母性理念は、幼児期の子どもとの接触体験によって生成され、母性意識の発達に影響を与える。母親自覚は多くの場合、胎動や超音波診断など妊娠後の体験によって生成されるというように、それぞれ生成される要因や時期が異なる。さらに、この２つが妊娠・分娩・出産・育児という体験を通して形成されることによって母性意識も形成されると考えられる。

母親自覚について花沢・飯塚（1978）は、妊産婦用の文章完成法（M-SCT）を用いた研究と妊産婦用の主題統覚法（M-TAT）を用いた研究を行っている。M-SCT の対象者は妊婦 180 名、褥婦 16 名であり、全員が初産婦であった。一方 M-TAT の対象者は妊婦 8 人であった。これらの結果から花沢は、母性自覚は妊娠後期に高まり、分娩体験によってさらに高まるということを明らかにしている。また、母性理念についての研究では母性理念を母親自身が幼児期に子どもと接触した経験によって生成されるものであるとし、時代の社会的状況を背景として、母親個人の出産や育児という体験や、文化や社会によって大きな影響を受けるものであると示唆している。母親自覚と母性理念の研究から、母性意識はとくに妊娠・分娩・育児などの体験を基盤として形成され、それらの経過に伴って発達変容するものであるとしている。

蘭（1989）は、母性意識のめざめを母親のめざめとし、それは胎動や腹部のふくらみによって、自分の体の知覚として実在感を伴ってあらわれるとしている。また、母性意識は胎動の仕方の変化から成長していくものであるとしており、妊娠後期までの母性意識の成長が、続く出産や赤ちゃんに対しての感情を育てるとしている。

次に、大学生男子・女子・妊婦・経産婦に質問紙票による母性意識に関する調査を行った松村（2005）によると、母性意識は「母性という用語をどのように認知しているのか」と「乳幼児に対する関わり意識」を規定する関係にあり、一人ひとりの人間が持つ知識や経験によって変化し体制化されて「母性意識」になるという。「子育ては女性に備わっている特有の性質によって行われる」と認知するか、あるいは「子育ては人間として子を育てるために女性に限らず誰もが行う」と認知するかによって、乳幼児に対する関わり意識が異なる。また、「母性に関する認知」は「乳幼児に関する関わり意識」を規定する関係にある。さらに、個人の知識や経験によって変化し、体制化され「母性意識」になる。

これらのことから、母性意識も母性と同じように、個人の知識や経験によって異なっていて、かつ発達変容していくものだととらえられていることがわかる。花沢（1992）や蘭（1989）に共通しているのは、母性意識が妊娠という出来事を経験することによって形成され、分娩・出産・育児という出来事が母性意識の発達・変容に深く影響するという点である。また、松村（2005）が指摘しているように、母性そのものへの認識や知識が母性意識に大きく関係している。つまり、母性意識という言葉には、「母親としてどうあるべきか」とか「母親とはこういうものである」という認知的側面と、「母親だからこのように行動する」といった行動的側面の両者が中核にあるようである。

ところで、花沢が述べたように幼児期に子どもとの接触体験をもつことが母性理念の生成に関わっているとすれば、少子化の進む現代社会では幼児期に子どもとの接触体験をもつことは難しいため、女性が母性理念を生成・形成することは難しくなると思われる。おそらく、それは男性にも当てはまるだろう。そうなると、妊娠・分娩・出産・育児という体験をするときに母性理念があまり発達せず、同様に母性意識も発達しにくくなると考えられる。その結果、出産後の母親役割や母親的行動（男性にも母性があるとすれば、父親役割や父親的行動も含まれよう）、そして子どもとの関係性の発達に影響が出るかもしれない。このことについては、今後さらなる研究が必要であると考えられる。また、母親自覚が生成される要因やメカニズムについてもまだはっきりとは明らかにされていないため、この点についても研究が必要であると考えられる。

３．母親意識の概念

母性意識につづいて母親意識という概念がある。この母親意識について大日向（1988）は、「母親である女性たちが、自分が母親であることをどのように認識し、受容しているか、また、子どもに対する母親としての役割や関わり方についていかなる意識を有しているかということ」と説明している。大日向は、母親自身の学歴・就業形態・子どもの成長にともなう加齢について検討した。調査対象は幼児をもつ母親から高校生の子どもをもつ母親までとされ、質問紙法による調査が行われた結果、母親としての意識や感情は学歴や就業形態、年齢等によって種々の変容を遂げていることが明らかにされた。具体的には、高学歴の母親や、学童期から中学生段階の子どもをもつ30代の母親においては、育児以外に自分自身の生活を求めるために母親役割の受容に対する消極的・否定的意識が強いことが明らかとなった。また母親の就業形態別に見てみると、専業主婦とパートの母親も、母親役割受容に対して積極的・肯定的である反面、育児に専念することで世の中からとり残されることや視野が狭くなることを懸念する傾向も強く、母親役割受容に葛藤が大きい。それから、自分が母親であことを肯定的に受容する背景には、「母親であることに生きがいや充実感を感じる」とか「母親としてふるまっているときがもっとも自分らしいと思う」などといった認識ではなく、「母親になったことで人間的に成長できた」というような理性的な判断、つまり認知的な自己評価が存在しているようである。

また、宮内（2001）は出産後10か月に父親および母親（有効回答425組）に対して母親意識に関する調査を行った。宮内によると、母親意識とは「健康な子育て行動を喚起し維持することの背景にある意識で、子どもに対して抱く愛着を伴った特別な気持ちや親の気持ち」であるという。ところで、父親と母親両者に対して調査を行ったことと母親意識には父親や家族の関わりが関連しているという分析は非常に興味深い。

山口（2003）は2事例を分析した結果、医師に妊娠の事実を告げられたさいに、「これから母親になるのだ」と将来母親になることを予期的に自覚し、今はまだ母親になっていないという意味で「未然形」の母親意識があることを指摘している。また、既に母親になっている自分を自覚し、「私はもう母親なんだな」という「已然形」の母親意識の自覚があることを指摘している。

以上の研究から、母親意識は発達・変容するものであると多くの研究者が考えていることがわかる。また、すべての女性に備わっているのではなく、その女性の生き方によって

変容するものであると考えられる。ただし、一般的には育児に専念する母親は母親意識が確立していて、母親役割に適応していると考えられがちであるが、育児に専念しすぎることが母親であることの消極的・否定的な受容に繋がると大日向が示唆していることは大変興味深い。大日向は、女性が母親としての自分を積極的に受け入れるために、育児だけでなく、自分のための生きがいを探す必要があると述べている。よって、今後は母親意識と育児以外の生きがいの有無、あるいは社会的自己と母親としての自己との関連といった観点から母親について研究する必要があるのではないかと考えられる。

4．母親同一性の概念

母親同一性という概念は、Erikson（1902-1994）が提唱した self-identity（自我同一性）から派生した概念であるといえる。自我同一性が「自分は何者で何をなすべきか」という概念であるとすれば、母親同一性とは、「自分は母親であり、母親として何をすべきか」という概念である。英語では maternal identity という表記なので、妊娠期における母親としての自己概念も含まれる。ちなみに、maternal identity という言葉はあっても、母性（maternity ならびに motherhood）の場合とは異なり、mother identity とか mothering identity という使用は見られない。

母親同一性について研究したものに、Reva Rubin の *Maternal Identity and the Maternal Experience*（1984）（新藤幸恵・後藤桂子訳では『母性論：母性の主観的体験』）がある（翻訳では maternal identity を母性や母性性と訳しているが、原版の表記に基づいて、Rubin の提唱する概念は母親同一性に含める）。Rubin は助産師という立場から 6000 人以上の妊婦と関わった経験から、母親同一性について以下のように分析している。

> 支えるという関係のなかで、未知で、なおわかり得ない個体との新しい持続的関係が始められる。女性の自己システムと自己概念のなかに子どもについての考え方と、この子の母親としての自己という考え方を取り込み、仕上げることが起こる。この心理的取り込みは、胎児と妊娠の生物学的発達と相互依存的であり、つりあいのとれた並行関係にある。女性は、子どもをもつということと母になるということとの 2 つの側面の均衡化へ積極的に適応し順応していくなかで、この取り組みは、観念化と行動上での自己のひたむきな傾注であり、連続的な絆の形成を表している。
>
> “わたし”と“あなた”という認知のうえでの位置づけと、“あなた”という概念に関しての“わたし”というものの継続的な再形成がある。この位置づけは、妊娠中によく行われる行動であり、この子についてのアイデンティティと相互補足的な母性性（maternal identity）が完全に成立するまで、新米の母性/新生児期を通じて続く。その子の確認の段階に伴って、相互的で助けになる自己というものの概念的なおり合わせは、女性を生物学的にもユニークな関係に結びつける。（中略）認知の一体性（子どもに起こっていることが自分にも起こっているという）は、妊娠や固体形成の過程を超えて続き、母性性の特徴である子どもに対する母親の特別な感情移入というものになる。

つまり、母親同一性は子どもに対する認識と母親である自分という認識とを、女性のそ

れまでの自己概念に組み入れ、新しい自己概念を作り上げていくことであると言える。妊婦は、身体的な変化の知覚と同時並行で子どもに対する認識と母であるという認識を自己概念に取り込み、母親同一性を発達させていく。また、母親としての理想化された自己像を通して母親同一性を形成する。

海外では母親同一性、つまり maternal identity という言葉は頻繁に使用されているが、ほとんどその概念についての定義づけは行われていない。自明のものとして扱われているからかどうかはわからない。われわれは母親同一性に関する論文をいくつか調べてみたが、Mireault et al. (2002) が「母親同一性は母親役割の受容と母親役割を遂行できているという女性自身が認識する感覚とに関係がある」と説明しているにすぎなかった。

日本国内では、母親同一性という言葉を使用している研究は、山口 (2004) と山根ら (2006) を除いてほとんどない。母親同一性について山根ら (2006) は、「自分はこの子の母親であるという母親としての明確な自己意識」や「子どもに対する母親としての主体的な育成的行動様式」と説明している。

山口 (2004) は、出産し生物学的に母親となっても、「自分は一人前の母親になっていない」と 8 割の母親が考えていることを指摘し、親としての同一性が形成されたときこそ、「心理学的な親」となると述べている。そこで、山口は、母親同一性尺度を作り、216 名に実施した。研究結果は省略するが、山口の作成した母親同一性尺度の項目を以下に紹介する。文末に「逆」とあるのは、逆転項目という意味である。

① 母親としてどうあるべきかわからない (逆)。
② 子育てについて自分なりの考えを持っている。
③ この先、子育てをどう進めて良いのか見当もつかない (逆)。
④ 『親である』自分は、本当の私ではないような気がする (逆)。
⑤ 母親として子育てを楽しんでいる。
⑥ 母親としてふるまっているときが、いちばん自分らしいと思う。
⑦ 自分は母親として不適格ではないかと思う (逆)。
⑧ 子どもにとってよい母親であると思っている。
⑨ 母親として自分に何か意味あることができるとは思えない (逆)。
⑩ 母親としてうまくやっていける自信がある。
⑪ 親として一人前だと思っている。

この母親同一性尺度の項目内容をまとめると、母親同一性とは、①母親としてのあるべき姿や行動がわかっていること、②母親としての自分を受容していること、③子どもとの関わりを楽しんでいること、④母親としての自己評価が高いことの 4 つの要素によって構成されていると言える。

以上のことから、母親同一性は母親としての自己意識と母親役割に対する遂行と肯定的態度が主たる構成要素だと言える。ただし、山口 (2004) は育児に対する楽しさも母親同一性に加えている。それから、母親同一性の形成時期については、Rubin (1984) と山根ら (2006) は妊娠期から発達していると考えているが、山口 (2004) は妊娠期における母親同一性についてはまったく述べていない。

５．われわれの見解

以上、母性、母性意識、母親意識、母親同一性という４つの概念について概観した。どの概念も母親になる（なった）女性が持つ、母親としての自己認識という認知的側面、母親としての子どもとの関わりや行動といった能動的側面、および子どもに対する特別な感情という情緒的側面を含んでいる。出産や授乳といった身体的側面はもっぱら母性に含まれているといえる。

研究内容を見ると、母親や女性にだけに限ったものでは母親意識や母親同一性という言葉が用いられ、調査対象に男性を含んでいる場合、母性や母性意識という言葉が使用される傾向がある。つまり、母性意識、母親意識、母親同一性に関しては明確な区別はほとんどなく、研究者の立場や調査対象によって任意的に使用されていると思われる。

現在われわれは、もっぱら初産婦に対する夢分析を通して、新しく芽生えた母親としての自覚といった認知的側面、子どもの世話をするといった能動的側面、および子どもへの愛着を持つといった情緒的側面の様態と発達を分析している。ところが、自分が研究しているものが母性、母性意識、母親意識、母親同一性のどれにあたるのか不明確でいた。ここでは、それぞれの言葉をわれわれなりに概念づけなおし、それぞれの概念の関係性について述べてみたい。そのさい、英語表記についても触れたい。

まず、母性（英語では maternity ないし motherhood）について。われわれは、生理、妊娠、分娩、授乳といった女性および母親特有の身体的機能と、自分の子どもを含めてすべての子どもたちや小動物といった自分より弱いものに対する特別な感情、たとえば、「かわいい」や「愛おしい」といったものを母性としたい。子どもに対する特別な感情は実際の自分の子どもと関わることができなくても、自分より幼い子どもとの幼少期からの関わりを通して形成されると思われる。また、小動物を含めた理由は、小動物に対する特別な感情移入は、食べ物を与える、排泄の処理をする、抱っこするなどの直接的な関わりを持つといった、養育的行動を喚起するからである。

次に、母性意識（maternal concept）は母性に関する知識や経験、母親全般に対して抱く印象、感情、および観念としたい。したがって、母性意識は、実母や周りの女性や母親との関わりによって形成される。つまり、母性意識は「母親とはこういうものである」といった知識と経験の集合体と言える。女性の身体的機能の発達を基盤にして、母性の持つ情緒的側面は自分より小さいものとの関わりを通して発達し、母性意識は自分より年上の女性や母親との関わりを通して発達すると考える。生理、分娩、授乳といった女性にしかない身体的機能をどのように位置づけるのかはまだ明確でないが、母性の情緒的側面と母性意識は男性でも発達すると言える。

母親意識について言えば、医師から妊娠を告げられたさいに「自分は母親になるのだ」とか「自分は母親になったんだ」と女性が最初に妊娠を自覚する母親自覚（maternal recognition）が母親意識（maternal consciousness）の始まりと考える。ただし、われわれは、妊娠の確認は医師によるものだけでなく、受診前の妊娠検査薬での陽性結果や受胎夢でも母親自覚は現れると考え、妊婦が「母親になった（なる）かもしれない」と自覚した瞬間はすべて含めることとする。母親自覚をもった後、女性は母性や母性意識からの知識や情報を用いて、母親としての自己のイメージ、母親としての適切な行動と選択、およびわが子に対する適切な態度や特別な感情という母親意識を構築しはじめると考えられる。

この母親意識の形成には、胎動や超音波写真での胎児の確認が大きく影響することと、女性にしか体内で子どもを育み、産むことはできないという理由で、女性特有の母親としての自己意識ととらえる。したがって、男性には持ちにくい、あるいは理解しづらい意識と言える。ちなみに、男性特有の意識は父親意識と言えるだろう。胎動で直接わが子を体感できる女性とは異なり、男性は母親となる妻を通してわが子を認識し、父親としての自己意識を形成すると考えられる。

ここで母親意識に対応する英語に関して触れておくと、先に述べたように、maternal awareness という英語と maternal consciousness という英語の二つのものがある。これらのうち awareness は俗語で麻薬による心的変化や精神世界への意識といったものがあり、aware は「気づく」といった瞬間的で浅い意味合いに感じられる。一方、consciousness の方は stream of consciousness という言葉があるように、一連の意識の流れ・集合という意味合いがある。したがって、われわれとしては、今後は母親意識を表す英語として、maternal consciousness を用いたい。

ところで、母親意識は意識的な側面のみを指しているが、母親同一性(maternal identity)は非常に広義で、意識的側面だけでなく無意識的側面も含む。また、母親としての自己受容と肯定感がその重要な構成要素と考える。つまり、母親同一性は、母性、母性意識、母親意識といったものを包括しており、母性、母性意識および母親意識が十分に発達したうえで母親同一性は獲得されると思われる。また、職業同一性、民族的同一性といった他の同一性と複雑に絡み合っており、互いの発達に影響を及ぼしあっていると思われる。さらにまた、母親としての自己受容や肯定感は母親同一性の主要な要素であると考えるが、妊娠・出産・育児に伴う心理・社会的危機も母親同一性に属するものとして扱いたい。なぜなら、女性・母親の心理が発達するプロセスやメカニズムを明らかにするためには、女性が妊娠・出産したがゆえに抱える心理・社会的危機を無視することはできないからである。母親になったがゆえの苦悩や葛藤は母親としての自己受容や自己肯定感、つまり母親同一性に大きな影響を及ぼし、ひいては母親意識、母性意識、母性にも影響が出ると思われる。さらに、母親になったがゆえの苦悩や葛藤は、女性が母親としてより一層発達する重要な分岐点と言えるからである。

われわれの調査で、ある初産婦は自分の夢を吟味することによって、意識している以上に大きな不安を持っていることを確認したことがあった。つまり、その初産婦が無意識下で抱えていた葛藤は質問紙法ではとらえにくいと言える。母親同一性の様態や発達をより深く解明するためには、無意識的なものが現れやすい投映法が適しているだろう。特に、夢は妊婦や母親が自ら作ったメタファーを用いるので、侵襲性が低く、自由な語りを可能にするので調査方法として適していると思われる。

文献

蘭香代子（1989）母親モラトリアムの時代. 北大路書房.

Deutsch, H. (1945) *The Psychology of Women: A Psychoanalytic interpretation. Volume 2.* New York: Grune and Stratton.（懸田克躬・原百代訳, 1964, 母性の心理/母性のきざし, 日本教文社）

厚生労働省（2007）平成 18 年度児童相談所における児童虐待相談対応件数.

http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dv16/index.html
船橋恵子（1992）「母性」概念の再検討．（船橋恵子・堤マサエ，母性の社会学，サイエンス社，1-62）
新村　出（2008）広辞苑　第6版．岩波書店．
花沢成一（1992）母性心理学．医学書院．
花沢成一・飯塚文子（1978）SCTに現れた妊産婦の母性意識――母性心理学研究X．日本心理学会第42回大会発表論文集，1080-1081．
前原澄子（2000）母性の発達．（小嶋秀夫・速水敏彦・本城秀次編，人間発達と心理学，金子書房，203-219）
松村恵子（2005）母性意識を考える．文芸社．
Mireault, G, C., Thomas, T. & Bearor, K.（2002）Maternal Identity among Motherless Mothers and Psychological Symptoms in Their Firstborn Children. *Journal of Child and Falimy Studies*, 11(3), 287-297.
宮中文子（2002）「母親への発達」に影響する父親および家族の要因．母性衛生，42(4), 677-685.
森田せつ子（2005）母性看護の概念．（後藤節子・森田せつ子・鈴木和代・大村いずみ編，新版テキスト母性看護1，名古屋大学出版会，1-19.）
村井憲男（1989）妊娠・出産による母性のめざめ．小児看護，12(4), 393-400.
名島潤慈・高岸幸弘・岡崎恵美子（1997）夢分析に関する近年の動向．熊本大学教育学部紀要，人文科学，46，329-341.
大日向雅美（1988）母性の研究．川島書店．
Rubin, R.（1984）*Maternal Identity and the Maternal Experience.*（新藤幸恵・後藤桂子訳，1997，母性論：母性の主観的体験，医学書院）
小学館国語辞典編集部（2006）精選版日本国語大辞典3．小学館．
高石恭子（2003）現代女性にとって母性を生きることの意味――人魚の物語に見られる母娘像の考察．（松尾恒子・高石恭子編，現代人と母性，新曜社，213-234.）
山口雅史（2003）母親になる過程を巡って――親になる過程を巡る二人の母親への面接調査．日本保育学会大会発表論文抄録，56, 310-311.
山口雅史（2004）母親同一性と育児ストレスとの関連．家族心理学研究，18(1)，17-28.
山根望・河合可南子・八田有加・佐藤直弘・渡邉ふくみ・名島潤慈（2006）妊娠と出産に関する夢研究の展望，山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要，22，193-204.